

氏名	李 柔 那
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博制第 39 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目	舞踊における呼吸法の考察 —僧舞（スンム）を手掛かりとして—
作品テーマ	空
論文題目	舞踊における呼吸法の考察 —僧舞（スンム）を手掛かりとして—
論文審査委員	主査 教授 浜 畑 賢 吉 副査 名誉教授 藪 亨 副査 准教授 堀 内 充

## 内容の要旨

本論は、韓国伝統舞踊の流れを汲む「僧舞（スンム）」を取り上げ、「僧舞（スンム）」が如何なる舞踊であるかをその由来から確認し、さらに「僧舞」における呼吸法の実相に焦点をあて、その上で筆者の舞踊体験を踏まえて「舞踊における呼吸法」の重要性について論じることを目的とした。そのため本論文は3つの章から構成されている。

第一章では、今日の芸術的な劇場舞踊としての僧舞が、そもそも何かということについて記述した。具体的には、一般的に釈迦への奉納として僧侶によって舞われた仏教儀式としての舞踊から派生したとされる。まず韓国伝統舞踊の壮大で複雑な体系における「僧舞」の位置づけを確認するとともに、朝鮮王朝中期の仏教様式としての「僧舞」が熱心に伝承され洗練されて芸術的な劇場舞踊としての「僧舞」の重要な要素へと組み込まれていく過程について文献・資料をもとに記述した。さらには、昭和初期の

舞踊家三橋蓮子のその報告と、韓国伝統舞踊「僧舞」の重要無形文化財・技能保持者（人間国宝）の後継者 金昴先の証言などに典拠して、近代から現代にかけての「僧舞」伝承の実相について考察した。

第二章では、「僧舞」の呼吸法の問題について、まず韓国伝統舞踊における「丹田呼吸」の在り方に注目して、身体内部の丹田から息を胸まで吸い込んで吐き出す呼吸法の概要について記述するとともに、「丹田呼吸」のリズムと深く関連している「結んで解く」という構造とそれに応じて現れる動きの特性について考察した。その上で、この「結んで解く」という呼吸法が、氣の属性であるふたつの異質に関連している「陰と陽との動的な均衡」を生み出し、韓国伝統舞踊を豊かで潤いのある舞踊にしてきたことを、韓国伝統舞踊の代表格「僧舞」における静・中・動の運動様式に注目して論じた。

第三章では、こうした研究を手掛かりにして、「無我の境地」を創作意図として定め、その感情を「僧舞の呼吸法」を活用して現代的な美意識に則して表現することを企て、博士作品「空」について、その大要を記述した。人間は手ぶらで生まれ手ぶらで死ぬ、という「空手来空手去（コンスレコンスゴ）の人生の喜怒哀楽の感情を主題にした韓国伝統舞踊「僧舞」と、その呼吸法を手掛かりとする創作舞踊である。生と死をめぐる人生の循環のイメージを舞踊における呼吸法を活用して、舞踊する身体と作者の心の世界、その受け手としての観客の世界を結ぶ。

以上のように論文においては、韓国伝統舞踊の流れを汲む近代的な劇場舞踊「僧舞」を取りあげ、「僧舞」が如何なる舞踊であるかをその由来から確認し、その上で劇場舞踊としての「僧舞」における「呼吸法の問題」を論じた。呼吸と呼吸法は、人間が芸術を通じて成し遂げることができる最高の境地へと舞踊芸術を導く重要な要因であり、韓国伝統舞踊の「僧舞」のみならず広く舞踊の芸術性を向上させる重要な役割を担うと考える。

## 審査結果の要旨

論文における僧舞という韓国舞踊の呼吸法を用いて、博士作品「空」をどのように舞踊創作するのが興味深かった。当初は「喜怒哀楽」を主題としていたが、本審査では「無我の境地（没入）」を創作意図として定めたという。生と死をめぐる人生の循環のイメージを僧舞の呼吸法を活用して表現を試みたようだが、観ていてもすぐに気づくものではない。論文としっかり組み合わせて追求する必要があった。

博士作品「空」について 副査 堀内 充の審査報告

幕が上がると青の衣装にまとった仲立ちとよばれる演者が舞台円周をすでに肅々と巡りながら歩んでいる。中心には白い光を浴びた“僧舞”の舞が始まろうとしていた。黄色の頭巾、そして韓国舞踊独特の長い袖、赤いたすき掛けが印象的だ。四方にいる4名のダンサーは喜怒哀楽の象徴とされているのだが、冒頭では論文で指摘されている呼吸法である「結び」と「解く」の丹田呼吸の具象化された動きにも映り、観る者に僧舞の呼吸のリズムのインパクトを与えている。

作品中盤になると4人は様々な形状で固まったり、あるいはひとりずつ独舞があつたりとフォーメーションを移動させながら動的に展開される。その間、僧舞はまさに「宇宙自然に満ちた生命力」を舞台床面に表した円周のなかで休むこと、止まることなく舞い続ける。長い袖が放物線を描くように伸縮させる動きが四方を囲む4名の動きと対をなす。この場面を通してみても想像以上に僧舞は動的に活発なムーブメントを展開していた。やがて群舞が四方に陣取るように舞台に設置された円形の文字が入ったマットの中に入ると僧舞は中央で緩やかに回転し始める。そして段々と速度を上げ流麗な舞いとなっていく。それが伝播したように群舞も旋回を始める。論文で記述された「陰と陽との動的な運動形式」の姿を思わせる光景がここで展開されたのでないか。美しい瞬間である。その後音響効果の鼓の轟音とともに暗くなりこの場面は終わる。

やがて僧舞は二本の打出を手に取り、いよいよ中央にある太鼓を力強く打ち始める。文字どおり群舞の“四の人間像”は激しく分節的な動作で高潮させながら四角状に踊る。成年期・中年期とはこの姿ののだろうか。躍動感溢れながらも舞いに没頭する姿に感じられた。そして、最後は力尽きたように全てが沈着し僧舞と人間像たちも身を伏せるように地面に沈んでいく。その周りは最初と同じく青の演者がゆっくりと歩み続けているなか幕となった。

博士論文について 副査 藪 亨の審査報告

本論文の申請者は、韓国の重要無形文化財「僧舞」の技能、ことに「呼吸と呼吸法」の習得に長年にわたっては励み、その間に「ひとりの人間の身体と心をつなぎとめ、まわりの人々の身体や心とのつながりを可能にしているのは、呼吸ではなかるうか」との思いを強めている。そこで本申請論文では「僧舞」の由来と、「丹田呼吸」を基本とする「僧舞」の呼吸法に絞って、僧舞の技能保持者への聞き取りなどのフィールドワークを行うとともに、韓国、日本、アメリカにおける文献・資料の調査・研究に努めている。その成果を、自らの舞踊体験に照らし合わせながら、意欲的に書き上げたのが今回の博士論文である。申請者が精魂を込めて書き上げた力作であり、優れた成果を収めており、今後さらなる展開も期待できる。よって、本論文を論文博士（芸術制作）の学位申請論文に値するものと認定する。

このように論文と博士作品を結びつけると僧舞の呼吸法の芸術性を舞踊によって体現させることに申

請者の研究目的があったことが充分に見て取れる。作品所見としては僧舞という韓国舞踊の持つ「氣」の力が視覚的に感じられ、その存在は際立って、主題の“空”の中に解きはなたっていた。ただこれは舞踊手の力にほかならない。無我の境地へ向かう熟練された舞踊手の舞いぶりに拍手を送った。舞踊振付によって「空」を芸術的に表現しているかといえば、まだまだ研究する余地はあったように感ずる。あくまでも作品は呼吸法のレクチャーであってはならないからである。この主題をもしバレエならばこう表現する、モダンダンスだったらこう表現するというように僧舞手法をとおして「空」を伝えなければならぬからである。しかしながら作品は一定の色彩を絶えず保っており、演者と舞踊手、そして空間を自身の世界観としてしっかりと観る側に伝えていた。この研究を審査しながら日韓の文化交流の役割を果たせるのでは、という期待も抱かせてくれた。この芸術制作によって社会貢献ができることも願いたい。よって本学位（博士）論文を合格としたい。